



ものの見方・考え方

伊與部史朗・典子
自然学類第1期卒業生

私達は、第一学群自然学類を78年に卒業し、以降20数年間生活をともにしている夫婦です。民間企業マンと専業主婦の二人が、筑波で過ごした4年間に基に今感じている事をそれぞれの視点から書いてみます。

民間企業マン編

私は、4回の転勤を重ね、子供も転校を重ねております。子供には、何か一つでも得意なものを身に付けさせ、自信をもち、新しい環境の中でも、友達づくりが出来るように願いつつ、世の中には、色々な考え方があるという事をその土地土地で教えて参りました。

私が、転居した時に、最初に目につくのは、新しい土地の欠点です。と同時に前の土地の良い点が見えるものでした。比較してみると、初めて分かる事が実に多いという事です。しかし、暫くすると、その欠点にも慣れてしまい、見えなくな

ります。そして、これを繰り返している、その土地に対するファースト・インプレッションが一番正しい評価であった事に気が付き、冷静に比較できる思考が身に付いてきた思いがします。この感性の基本になっている考え方が、在学中のある授業との出会いから出来上がった様に思います。ここでは、社会に出てからの事例をあげて説明したいと思います。

それは、1年の教養科目の『ものの見方・考え方』というものです。1つのテーマを1ヶ月4回の単位で各学系の先生が入れ替わりされる授業でした。例えば、『人』をテーマに物理系・医学系・人文系・社会学系の先生がそれぞれの観点からの授業をするというものです。この授業は、社会に出て非常に役立っております。

一つの事例

私は、卒業以来、出版社で営業を担当しておりますが、仕事柄、学校や教委

員会へ行く事も多く、多方面からの情報が入って参ります。例えば、今回の新指導要領については、そんな情報とともに一般のユーザーに説明するとき、細かい変更点は別にして、「子供自身が、アクティブに動かなければ前進はない。そして大人は子供に対して何をしてやれるか。」という問いかけをしつつ、子供が自ら動くようになる話を3年前と何ら変わる事なく説明しております。

私の基本的な考え方は、『世の中には、変わって良いものと、変わってはいけないものがある。』というものです。指導要領などは、変わって良いものですが、教育の目的は、変わってはいけない、周りの情報から振り回される事なく、事の本質を見抜くことが出来る様にする事ではないでしょうか。事の本質を見抜くとは、一つの事象を多方面から見ることから始まると思います。果して、今の学校教育や大人達からの教育は、そうなっているでしょうか。

もう一つの事例は、

会社の若い社員に、「業務改善能力を持て」と指導しております。当たり前の事を当たり前の時間を掛け、当たり前の成果を挙げる事は、誰にでもできます。これが出来ない人は、企業にとっては不要です。いかに短い時間で、いかに確実な成果を挙げ

られるかが重要なのです。そのためには、いろいろな角度から物を見る経験と周辺の幅広い知識が必要となり、それらの組み立てが能力となって参ります。

世の中には、一方向からしか物を見ない人が、いかに多いか、自分の見る角度を変えるだけで、解決策が見つかる事が、いかに多いか、そんな分析もこの授業から生れてきたように思います。

専業主婦編

結婚して21年目。ずっと専業主婦として過ごしている私が書くことが皆様にお役に立つとは思えませんが、夫を社会人とするなら、私は家庭人として生活者の立場から社会を見る主婦の視点を書かせていただきたいと思います。

息子たちは、20才・18才と私たちが筑波で学生時代を過ごした年頃になりました。当時、校舎も学生宿舎も原野にポツンと点在し次々道路が通り建物が現れるというなか、まさに、フロンティア精神、学際的研究という言葉で先生方から指導を受けたことを思い出します。周囲には飲食店さえなく、皆宿舎のフロアに車座となって将来の夢や、社会批判などを話し盛り上がることもしばしばでした。その気風を二人とも共有していて私たちの家庭の土台に大いに残っていま

す。二人の息子たちは、多少個性の違いはあっても、自分の考えと意志をしっかり発していく力を持って育っていることを親としてうれしく思っています。

3年前のホームカミングデーの会場で、ある方から、「今の時代、女子大や家政学の役割はあるだろうか？」と聞かれました。出席者の中で100%家庭人と自己紹介した私に対しての質問でした。私は結婚と同時に「婦人之友」という月刊誌の愛読者会である友の会に加わり活動しています。家庭のこと、家事といわれる日常のことは、社会という概念と対極的に、個人のこと私的なことと思われています。しかし、社会の政治活動も経済活動も、個人の生活を支えるものであり、一般といわれている多数の個人生活によって動かされているものでもあるのです。どちらかといえば、今までの社会経済は企業先導、利益追求型の生産する立場で動いてきました。大量に安く生産するだけでは売れない状況になって、少しずつですが、ようやく消費者、生活者を意識した商品が出るようになってきました。そうしたとき求められるのは、生活者の立場として、何をどう選び取っていくか、正しく選択する力であると思います。同時に、自分の選択した生活が地球環境に将来の社会にどう関わっていくのかという視点を常にもって、責任を感じ

ていることが必要であると思います。

先日、数人の幼児が集まっているところで「ぼくが一番！」を主張している子どもがいました。親が知らず知らず一番にできることを誉めて育てているのでしょうか、集団のなかでトラブルの目となっていました。自分が一番良いと思っていても周囲から視点を変えて見ることによって見え方が違ってきます。今私は友の会という団体の中で、自分の生活をいろいろな角度から見ることをしています。社会と家庭、外は男性、内は女性、と分けていた時代は完全に終わっています。「男女共学の家政学科を作ってください」と答えてきましたが、企業にあっても、家庭にあっても一人ひとりがそれぞれに考えを伝え合い、接点を作っていく姿勢は、筑波において培われたものであると思っています。

20数年経ても、立場が違っていても、筑波大学での4年間は、二人にとって掛替えのない時間であったと思います。ありがとうございました。

追伸；とは言っても、やはり、スポーツや賞などで筑波大学の名前が多く出てくれることを、心から期待しております。

(いよべしろう・のりこ)